いじめの予防・停止に関わる諸要因の検討

教育デザインコース 心理学領域
関　真伍

1. はじめに・目的

私は教育デザインフォーラムにおいて「いじめの予防・停止に関わる諸要因の検討」という発表題目で教育デザインについての発表を行った。

本研究におけるいじめの定義は、「児童生徒が、一定の人間関係のある者から、暴力や犯罪とは異なる心理的・物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの」というものであった。なお、この定義は文部科学省（2012）の定義に、河北（2008）の指摘に基づいて一部加筆をしたものであった。

本研究では、森田・清水（1994）の提唱した「いじめの四層構造」を参考に、いじめの予防・停止について考察した。いじめの四層構造とは、いじめ場面において「被害者」、「加害者」、「観衆」、「傍観者」の 4 つの役割が存在し、いじめに直接関わらない「観衆」と「傍観者」がいじめの発展と停止双方に大きく関わっているという理論である。また、森田・清水（1994）によると、特に傍観者の中から、いじめを止めに入る「仲裁者」が現れることがあるとされる。

そこで本研究は、傍観者がいじめを止めることに積極的になる要因と、いじめを止めづらくなる要因を明らかにすることを目的とする。

2. 方法

2015 年 8 月 24 日から 9 月 8 日に、横浜市内の公立小学校 5.6 年生 344 名を調査対象者として質問紙調査を実施した。

なお、本研究に用いた質問紙は、いじめは良くないものとする自分自身の規範の程度を測定する「いじめ個人規範尺度」、いじめは良くないものとするクラスの友だちの規範の程度を測定する「いじめ集団規範尺度」、いじめ場面における行動を尋ねる項目である「いじめについての物語」からなるものであった。なお、「いじめについての物語」の得点を以後「いじめ停止得点」と表記する。

3. 結果

いじめ個人規範尺度といじめ集団規範尺度の得点の高低の組み合わせにより、調査協力者を 4 群に群分けした。群ごとにいじめ停止得点を比較すると、「個人低×集団低」群のいじめ停止得点は、他の群より優位に低いことが明らかになった。

また、加害者が「よく話す」友だちであるときの方が、加害者が「普段はあまり話さない」友だちであるときよりもいじめを積極的に止めようとすることが明らかになった。

さらに、いじめの理由について、最も止めづらいのは「こらしめ」を目的としたいじめであることが明らかになった。

4. 考察

いじめ個人規範、いじめ集団規範といじめとの関係について、「個人低×集団低」群の児童のいじめについての考え方は、他の群の児童から独立していると考えられる。この群の児童に対しての関わり方を工夫する必要性が示唆された。

また、加害者が「よく話す」友だちであるとき、いじめを積極的に止めようとすることが明らかになった。普段はあまり話さない友だちの行動に対してはそもそも無関心であるために、悪い行動をしていても止めようとしないことが考えられる。このことから、日頃の児童相互の関わりの重要性が示唆された。

最後に、最も止めづらいのは「こらしめ」を目的としたいじめであることが明らかになった。「こらしめ」のいじめは正義のいじめとも呼ばれる（大西他，2009）。傍観者の中に「被害者側に落ち度がある」という認識が存在する場合、いじめを止めづらくなることが考えられる。